近愛文書 ⑮

おやさと研究所員
安井　幹夫　*Mikio Yasui*

39　明治廿八年十月七日　刻限御話し

さあ〳〵これ〳〵こんやと云ふこんや　すうきりさしずする　とんな事もさじす通りもちいらねばならん　とふゆふさしずするなら　日々せわしい　いそかしいと云ふわ　とふゆふ処からせわしいなる　みんなでゝくる　まんそくあたへる　まんそくのりがせわしい　世界いまゝて　けつこふわわかりてあれともこの里にわか」（103 オ）

らん　たふん人がいりこむ〳〵　これからなんほいりこむやしれん　とこからてゝくるやわからん　世上にてハそうじをしかけたとこから　とふゆふものがでゝくるやわからん　いつともわからん〳〵　先からさとす　あつてからさとすやない　さしす通りみなあつてくる　あら〳〵ハいまゝてわかりてある　おふぼふのよふなもの　是から日々日がたてバとふゆふ事も」（103 ウ）

はこばにやならん　むつかし事一寸はなしかける　とふゆふ事はなしかける　なるほどみのさわり　いく系〳〵　なんぼさしずしたとて　さしずわそのばかぎり　とふしたらよい　こふしたらよいとゆへと　みなそのまゝさしずなくても　かつてたけわ　よふてける　さじす通りでけん〳〵　さしずとふてきた事もある　できてもふしよ〳〵だらけ」（104 オ）

あちらはらたて　こちらはらたて　一ツの里にをさまらん　たかいたかいのこゝろさい　みんなはなしあるなら　一時の里にをさまる　是迄ハおれか〳〵と云ふても　みんな神の道　神かはたらけばこそ　日々の道である　それてむつかしい事つとめかける　年限〳〵とれたけ年限と云ふ　年限のたつた者でなけにや用木にわならん　つかわれよふまい　年限」（104 ウ）

たゝん者ハ用にわならん　年限たつた者ほとつよいものわない　用木とゆへバふしん　なんほ　とれだけきれなといふても　わかいものやほそい者でハもたん　年限たつた者なら　なんほふしかあつてもいかんで　いかんてあつてもこたへる者かこたへるて〳〵　そんなほそい者ハまにあわん　とふゆふ年限たいて年限そふたけまにたつ　年限の古いよふ木でハそろわん」（105 オ）

あと〳〵たらん処ハ年限まつより外はない　年限たつたならこそ用木といふ　用木ハなんぼいらつてもいかん　そこてこれとふしよと　めへ〳〵のまゝとゆふてハせかいのまゝにいかんとふしたとてできん　でけん者ハしいとしていても　てけるものならでける　とふしてくれとも　こふしてくれともいわんことは一ツが用木の力ならどふする　よふもとす」（105 ウ）

事できん　みんなそれにもたれ〳〵で　わか木かそたつ　世界なんぼそだつともわからん　そふしたら世界とんな事でけてもこわい道わない　これからせいて〳〵　とこまでせくやわからん　世界にわ新らし道が千すじもてけてきた　とんな用木てけるやらわからん　あちらの国から用木　こちいの国から用木たにそこにもある　ひ」（106 オ）

くき処から引出せは　はやい〳〵高い処の用木ハ　する〳〵とおれてくる　とんな用木よせて　とんなしことするやらわからん　ちいさい心わやめてくれ　うたぐり〳〵心わやめてくれ　ほしいおしいうらみそねみの心わやめてくれ　そこでせき一ツの里をよくきゝわけてくれ　里一寸たつたひとことはなしおくで（106 ウ）

40　明治廿九年四月廿一日

さあ〳〵いかなる事もいふてくる〳〵　みなこれまで十分はなしつたへたる　とんな事もしよふといふてなるやない　今一時たずねるところ　どふゆふ事もある〳〵　たずねる処どんな事もすつきりとりしらべさす　とりしらへさすといふへバ　おかしいおもふやろ　地方庁へねがふ〳〵　却下や〳〵　とふしてもならんとき　このところ」（107 オ）

にでわならん　みなすうきりよせてしまふ〳〵　たすねにやなろふまい　一時みれバこわいよふなもの　こわい中うまい事がある　水かつく　山がくずれる　大雨や〳〵　いく処がない　なれとあとわすつきりする　今一時とふなろふとおもふ　心さへしつかりしていれバ　はたらきをするわい〳〵　はんたいするものもかわい我子　ねんする者もハなをの事　なれどねんずる者でももちいねは　はんたいどうよ」（107 ウ）

ふの事　是迄ほんのことば〳〵でさしずしてある　これわといふよふな物ハさしずがさしずやないとゆふ　せかいのはんたいハいふまでやない　道の中のはんたい　道の中のはんたいハこ系をする処をながしてしまふよふなもの　こんな処にこんな事があつたかと　あさやかわかるほどに〳〵　かならずくやむやない　くやむたけつなげ〳〵　これからハとうてもみなあつめる」（108 オ）

ほとに　山がくづれる　水がつく　雨風や　どこへかけつく処もないといふよふなもの　とろ水すつきりなかしてしまふ　とろ水の間わとんなしやんしてもどうもならん　心一ツの里をつなげ〳〵　いかんとゆへバはいとゆへ　ならんといふへばはいといふへ　とんな事もみてをるほどに〳〵

会議ノ点に付御願

さあ〳〵ぜんもつて事情さとしたる」（108 ウ）

とろ水の中といふわ　とこへかけつこふといふよふなもの　一時とろ水の中やから見ている　尋る処ハみなこふしたらよかろふといふ処　それわいかんとわゆわん　おちてしもてからとうもならん　なくなつてからどうもならん　とろ水の中でもあちらへはいあがり　こちらへはいあかりすれハ　とうなり道がつくこれがいかんといふへバはいとゆへ　ならんといふへバはいとゆへ」（109 オ）

是よりはいあかる道わない　もふあんしんの言をさけておこふこれがならんとゆへバはい　いかんとゆへハはいとこたえておけさあ〳〵尋る処〳〵　それわ心にもつて又ぼつ〳〵」（109 ウ）

41　明治廿八年五月十九日　本部長御伺後六時半

（注）おさしづ書では、「明治二十八年五月十九日　午後七時半分支教会長一同帰部の上、教長御身上に付、本部員共に分支教会運び方将来心得事情願」である。

さあ〳〵〳〵だん〳〵事情ハはこび〳〵　又事情二事情　ミなそれ〳〵とふく処　心事情どふもつて　一日の日にたづねる処　よふミな一ツの事情から心と云ふ里をもてくれにやわからん　もふをたやかいけば　おだやか心でこゝろをわかさんよふよふきゝわけ　みなせつと云ふ里かある　どふゆふ」（110 オ）

せつもある　せつきてだん〳〵事情できたで　せつとりかやすに　とりかやされん事情になる　みな兄弟つれてもとりたからよふきいてくれ　長らくの道の事なら　とんな日もある　兄弟ばかりならよい　なれどそふ〳〵わいこまい　よふききゝわけつゝしみの心が元である　（以下次号）